

渦潮を観光戦略にどう生かす

グローバルインタビュー

徳島県鳴門市市長

泉 理彦 氏

いずみ・みちひこ 1961年生まれの53歳。徳島県鳴門市出身。1984年京都産業大学法学部卒業。88年鳴門市役所入職。2003年鳴門市議会議員選挙初当選。05年再選。09年鳴門市長就任。13年再選。趣味は30歳の時から始めたランニングと猫の世話。土日に40分から1時間ほど走り、ホノルル・マラソンにも出場したこともある。猫は現在4匹。世話をしていると「かわいらしく、いやされる」と話す。



2県4市で世界遺産登録狙う 地場産業、努力次第で支援濃淡

徳島県鳴門市が「鳴門の渦潮」の世界遺産登録に向け、県境を越えた広域連携を本格化している。スポーツ大会の運営などで連携実績がある兵庫県南あわじ市と渦潮の観光イベントを2014年3月に共同で開催。14年12月には徳島県や兵庫県を巻き込んだ推進協議会も発足し、学術調査や環境保護、情報発信の動きに弾みがつく効果が期待される。渦潮の世界遺産登録に向けた取り組みによる街づくりについて、泉理彦市長に聞いた。

Q 渦潮の世界遺産登録に向けた広域連携を本格化している。狙いと手応えは。

A 1998年から鳴門市で観光事業者を中心に鳴門海峡を世界自然遺産にしようという動きが始まったが、実現は難しいということで3年ほどで活動休止となった。2009年、「厳しいとはいえ可能性がゼロでないなら再挑戦してみませんか」と市長選マニフェストで再び目標を掲げた。98年ごろから鳴門観光はじり貧傾向が見られ、市民が再度一つの目標を持てることができればという思いがあった。世界遺産のテーマは自然保護だが、経済・観光振興にもつながればと期待した部分もある。

できることから始めていこうと、地道にセミナ

ーやフォーラムを開催してきた。渦潮という資源を共有する対岸にある淡路島の兵庫県南あわ



じ市に呼びかけ、11年に鳴門、12年には南あわじでフォーラムを開催した。13年には鳴門市と南あわじ市で推進交流会を開催し、共通ロゴマークとポスターの作成、両市の観光行事である「渦開き」と「島びらき」の翌年からの共同開催も決定した。

こうした実績の積み重ねが奏功し、広域連携により世界遺産化に向けた取り組みの機運を高める



2015年に開通30周年を迎える大鳴門橋の記念イベントも生かし、渦潮の世界遺産化に向けた取り組みをアピールしていく

という狙いが着実に進み始めている。南あわじ市など3市は兵庫県を巻き込む動きを先行させており、南あわじ市と兵庫県が14年度から事前調査に乗り出している。鳴門市側も徳島県に協力を働きかけ、その結果12月に両県と4市、関係団体が構成する推進協議会の発足にこぎ着けることができた。

協議会は学術調査、環境保全、広報・PRの3つの部会を設置した。学術調査では兵庫県が着手している自然遺産登録に向けた調査のほか、徳島県が中心となり文化遺産登録に向けた調査も実施する。渦潮は土佐日記などの古典にも関連する記述がある。鳴門市としてこうした文化調査に協力し、自然・文化複合遺産としての登録も視野に入りたい。

もちろん時間はそれなりにかかると思っている。だが、兵庫県と徳島県が協議会に参加してくれたことで発信力が高まる効果が期待できる。

Q 2015年は渦潮を渡る「大鳴門橋」の開通30周年にあたる。世界遺産登録への取り組みとどう連携させるのか。

A 30周年記念事業を利用して、渦潮の世界遺産化に向けた取り組みをアピールしたい。具体的には渦開きなど毎年恒例のイベントに30周年の冠を付ける。6月に県が中心となって予定している記念セレモニーにも協力する。交通・観光の関係機関とも連携を進めたい。大鳴門橋を管理する本州四国連絡高速道路が3月下旬に記念ツア

ーを計画している。普段立ち入ることができない大鳴門橋の管理路を通り、橋の基礎に降りて渦潮を間近で見られる。渦潮に注目が集まる効果が期待できる。30周年を盛り上げる市の独自イベントとして、夏をめどにサツマイモなど鳴門の地場産品を扱う「にぎわいフェスティバル」も開催する予定だ。地場産品を使ったギネスブックに載るような企画にも挑戦したい。例えば特産のサツマイモ「なると金時」を使った世界1のスイートポテトなどを検討中だ。

「第9」もブランドに

Q 豊かな歴史文化を生かし、ベートーベンの交響曲第9番・アジア初演の地という史実を基にした文化・観光振興にも取り組んでいる。

A 1917年に約1000人のドイツ人が鳴門市の捕虜収容施設で生活を始め、18年にアジアで初めて第9を演奏したという史実がある。100年前の大正時代にドイツ人との「友愛」を先人たちは実現できた。我々は国を超越した友愛を引き継いでいきたい。そのシンボルとなるのが第9であり、100年の区切りとなる2018年に日本や世界にその意義をアピールしたい。

具体的には18年に100周年記念コンサートを予定しており、招聘する指揮者などを検討中だ。捕虜収容所の初代所長である松江豊寿氏の出身地である福島県会津若松市とも一緒に何かできないか相談していきたい。鳴門市民などで構成している「第9を歌う会」によるドイツへの里帰り公演もできないかと考えている。14年5月にはご当地版電子マネー発行による文化・観光振興に関する協定をイオンと結んだ。ベートーベンの肖像画などをデザインに採用した電子マネーをイオンが発行し、電子マネーの利用料金の0.1%を市の第9ブランド化推進基金に寄付してもらっている。電子マネーは鳴門の第9ブランド化の取り組みを全国



毎年6月、第9コンサートを鳴門市で開催している

に知ってもらう効果も期待できる。

捕虜収容施設があった当時の板東地区（現在は大麻町）は14年に開創1200周年を迎えた四国遍路の1番札所である霊山寺がある。他の地域から訪れる人を温かく受け入れる土壌があったのだと思う。鳴門市はドイツのリューネブルク市と40年に渡る姉妹都市交流を続けている。相互に交流使節団を派遣しており、人口6万～7万規模の都市でこうした交流が続いているのは珍しいのではないか。第9というつながりがあるドイツの都市と交流したい思いからスタートしたことが長期間にわたる実績を支えていると思う。

地場企業の支援で経済振興

Q 観光以外の経済振興では関係機関を集め中小企業を育てる手法「エコノミック・ガーデニング（EG）」に力を入れている。その狙いは。

A 2000年頃、補助金を活用して大手電機メーカーを誘致したある県の手法が画期的と評価されたことがあった。地域にとって大手企業もたらす雇用は非常に重要なので、市民も大企業を誘致してほしいと言いがちだ。だが、今できるかという国内の地域間競争、海外との競争があり、難しいのが実情だ。市内では工業団地の用地もなく、地価も工業団地としては高い。

地場の企業に頑張ってもらったり、創業を支援したりするのが、時間はかかるが最も有効だろう。

EGは地域を庭、企業を植物と捉えて支える産業振興策だ。自治体、コンサルタントなどの専門家、金融機関、教育機関といった幅広いメンバーが地域の中小を経営、デザインなど多角的な側面から支援する。鳴門市ではまず企業間の連携を促す取り組みから始めた。支援先には濃淡をつけて、頑張っている企業を伸ばしていく方針だ。市内の企業を訪問調査したところ、食品の加工、販売の分野で元気な企業が多いことがわかった。そうした企業ではブランド農水産物の「なると金時」や「鳴門ワカメ」などを扱い、若い人が活躍している。14年夏、市や商工会議所が調整役となり、まず市内企業の特産品を詰め合わせたギフトの開発に取り組んだ。成果はこれからだが、さらに次の展開も考えようという機運が高まっている。

市と金融機関との連携は従来はあまり十分でなかった。だが、最近は市内にある金融機関の支店長クラスとも情報交換が進んでいる。今後は金融機関や中小企業家同友会をはじめとする経済団体、教育機関、NPOなどの市民団体と企業の支援ネットワークを構築していきたい。16年度施行をにらみ「中小企業振興基本条例」の制定も目指す考えだ。やる気のある企業を支援する根拠にするもので、理念をうたう条例ではなく市民が見てわかるように実効性をもたせた具体的な内容にしたい。

質問を終えて▶▶

徳島県鳴門市は対岸の淡路島にある兵庫県南あわじ市と病院や買い物などの面で生活圏が重なっている。約20年前からスポーツ大会などの運営で行政交流を進めており、泉市長はそうした県境をまたがる広域連携の実績を渦潮の世界遺産登録という1自治体を越えた取り組みに生かそうとしている。

世界遺産は観光振興の効果も期待できる。消費者は自治体を越えた「地域」を単位に観光地を選択する。淡路島は関西圏からの集客力が高く、鳴門市にとって広域観光の連携先としても魅力がある。世界遺産登録への取り組みを通じて、淡路島経由で鳴門を訪れる観光客の増加につながる効果も期待される。

（徳島支局長 上原 吉博）